

『治承物語』の藤原成親とその周辺 〔下〕

尾崎 勇

(五) 「世継物語」と源俊賢

『新古今集』の代表的歌人の慈円が『治承物語』を企画・創出させたのは、閑雅な西山の空間であった。その西山で承元三年（一一〇六）六月に『愚管抄』の淵源となっていく『慈鎮和尚夢想記』を草し、建保四年（一二二六）正月の聖徳太子の霊告が符合してくる時運のもとで、『世継物語』の系譜につながる『治承物語』を本説取りにしながら、「愚癡無智ノ人」にも分かるように末代の道理を説諭していく。そのことは、まず『愚管抄』別帖の冒頭で「物ノ道理ヲノミ思ツバケテ、老ノネザメヲモナグサメツ、イトゞ、年モカタブキマカルマヽ二、世中モヒサシクミテ侍レバ、（中略）保元ノ乱イデキテノチノコトモ、マタ世継ガモノガタリト申モノモカキツギタル人ナシ。少々アルトカヤウケタマハレドモ。イマダエミ侍ラズ。（中略）ヒトスヂニ世ノウツリカハリオトロエクダルコトハリ」（巻三——二九ページ）とし、別帖の崇徳天皇の条では「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ乱逆ト云コトハヨコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。コノ次第ノコトハリヲ、コレハセンニ思テカキヨキ侍ナリ。」（巻四——二〇六ページ）として同時代史を始発させているからである。最初の施線で長生の自分は世の中のことをながくみてきたといい、保元の乱以降の「世継物語」であるとの意図を籠め、それを末尾の施線で書き残しておくことと慈円はことわっている。この三箇所の施線から『大鏡』・『今鏡』・『水鏡』の「世継物語」の方法にも倣って、波線部にあるように「武者ノ世」の見聞した事象を道理史観で叙述していったのは歴然なのである。また二箇所の二重施線「ウツリカハリ」・「セン」の語彙には歌人の思念が反映している。それは「ウ

ツリカハリ」は歌の先師の藤原俊成が、歌の「史」の論で「……こなたさまの歌、時世の移り行くに従ひて、姿もことばも改まりゆく有様を、代々の撰集に見えたるを、端々記し申すべきなり。」(『古来風躰抄』・上)としていたことと呼応する。これに関連させてみていくと『愚管抄』付録前半の「史」の論には「日本國ノコトバノ本體ナルベケレ。ソノユヘハ、物ヲイヒツバクルニ心ノヲホクコモリテ時ノ景氣ヲアラハスコトハ、(中略)詩歌ノマコトノ道……」(巻七——三三三ページ)としているのも、やはり俊成が、

よき哥になりぬれば、その言葉。姿の外に、景氣の添ひたるやうなる事有にや。たとえば、春花のあたりに霞のたなびき、秋月の前に鹿のこゑを聞き、垣根の梅に春の風の匂ひ、嶺の紅葉に時雨のうちそゞぎなどするやうなる事の、うかびて添へるなり。

(『慈鎮和尚自歌合』一八五)

と標榜していた。二重施線の「景氣」すなわち秀歌になると言葉、「姿」すなわち「風体」という様式の他に、その絵画的イメージが派生するといひ、春の花のあたりに霞がたなびき、秋の月を前にして鹿の声を聞き、垣根の梅に春の風が匂ひ、嶺の紅葉に時雨が注ぐ、というように彷彿とした映像が加わるのだと説いていた。この俊成の歌論に慈円は倣って「史」の論を展開している。また『愚管抄』の波線部の「セン」すなわち「詮」とは、一番大事な眼目の意味で、歌論関係の文章に特によく用いられる語とすでに指摘されている(『例解古語辞典』三三省堂の「せん」の項)。そのため「史」の論では末代の道理として顕現した慈円の甥の子である九条道家の子の三寅こと頼経が鎌倉幕府の將軍継嗣になったことを末代の道理であると揚言する文章に於いて、

大方世ノタメ人ノタメヨカルベキヤウヲ用ル。何ゴトニモ道理詮トハ申也。世ト申ト人ト申トハ、二ノ物ニテハナキ也。世トハ人ヲ申也。(中略)太神宮・八幡大菩薩ノ御ヲシヘノヤウハ、「御ウシロミノ臣下トスコシモ心ヲオカズヲハシマセ」トテ、魚水合體ノ禮ト云コトヲサダメラレタル也。コレ計ニテ天下ノヲサマリミダル、事ハ侍ナリ。

(巻七——三三八〜三九ページ)

として、二重施線にあるように「詮」と確言したうえで、施線で冥衆の宗廟神と社稷神の約諾に言及することで「冥顕二法」の道理から君臣の道を跡付けていく。そして、

コ、ヲ詮ニハ君ノシロシメスベキナリ。今ハ又武者ノイデキテ、將軍トテ君ト撰録ノ臣トヲオシコメテ世ヲトリタルコトノ、世ノハテニハ侍ホドニ、此武將ヲミナウシナイハテ、誰ニモ郎従トナルベキ武士バカリニナシテ、ソノ將軍ニハ撰録ノ臣ノ家ノ君公ヲナサレヌル事ノ、イカニモく宗廟神ノ、猶君臣合體シテ昔ニカヘリテ、世ヲシバシヲサメントヲボシメシタルニテ侍レバ、ソノ始終ヲ申トヲシ侍ベキ也。

(巻七——三三二ページ)

として、二重施線のようにやはり「詮」の語を象嵌し、施線で冥衆のはからいで撰録家の子弟が將軍に就くのは、君臣合体魚水の交わりの道理が通っていると説論する。そのことで『愚管抄』の別帖よりの承久元年（一二一九）までの歴史叙述を括った。ところが、この『愚管抄』付録の「史」の論につづけて、「諫言」の文章を書き継ぐ。付録の中間部では後鳥羽院の周囲に蟠踞している近臣達が徒党を組んで廟堂の秩序を乱していると直言して、院をはじめとして要路の高官にもむけて鋭く慈円は詰め寄る。そのため後鳥羽院は、別帖から付録の前半である「史」の論までの当為の「君」として造型されていたのが、「諫言」では不明の「君」へ変調してしまっている。そうであるから、「諫言」の文章の始発は、

又コトノセン一侍リケリ。人ト申モノハ、センガセンニハニルヲ友トスト申コトノ、ソノセンニテハ侍ナリ。

(巻七——三四二ページ)

となっている。歌人慈円の感情を露わに奔出させているわけである。「セン」を多用して似たもの同士が我が物顔に廟堂で振る舞っていると告発し、右文の直後には、

イサ、カ仏神ノ御サタヲアフグバカリナリ。モチキル時ハトラトナルベキ人ハサスガニ候ランモノヲ、ヨキ物ハ世ノヤウヲミテサシイデヌニコソ侍ラヌ。カクコノ世ノウセユク事ハ君モ近臣モソラコトニテ世ヲオコナハルメリ。

とし、冥衆の意向が那邊にあるのかいぶかしみ、虎のような有能な人材がいなわけではないのだが、院の近臣が徒党を組んで嘘でもって世を治めようとしていると現今の危機をはらんだ時局に慈円は悲憤慷慨している。この「諫言」の文章は、『治承物語』が語っている鹿ヶ谷の山荘で後白河院も臨御している場に器量ある静賢を点描しつつも成親をはじめ院の近臣が平家討伐の密議を凝らす政治状況を思い起こさせるはずである。要するに『愚管抄』付録中間部の「諫言」の文章には、慈円の企画した『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」の顛末が通底しているとも思われる。一方そのことは、承久の乱の前夜を時局を史論に叙述している慈円は、現今の腐敗する原因に院の近臣の跋扈があることを、すでに院政の政治形態を始発させた後三条天皇の条のなかで「スエザマニハ王臣中アシキヤウニノミ近臣愚者モテナシ／＼シツ、世ハカタブキウスルナリ。」(巻四——一九九ページ)と説論していたことから明白であろう。

『新古今集』の代表的歌人慈円は物語・漢詩文・故事などの表現や内容の一部を取用することで一首の背後に物語や詩文の世界を揺曳させる本説取りの修辭を弁えている。『愚管抄』の文章にも本説取りが介在している。そのため『愚管抄』の「鹿ヶ谷事件」をめぐる「句」にもその修辭が襲用されて複雑微妙になっているわけである。

本説取りを巧みに駆使する歌人慈円の心情を窺いながら、『愚管抄』をみていこう。すなわち、

コノ貞信公の御子ニ小野宮・九條殿トテヲハスメリ。此事トモハ、ヨツギノ鏡ノ巻ニコマ／＼トカキタレバ申ニヨバネドモ、ツジ／＼ノアフトコロヲバ申ベキニヤ。

(巻三——一五七ページ)

として、二重施線にあるように「ヨツギノ鏡」すなわち『大鏡』を取用しながら、藤原撰関家が廟堂の中樞に進出していく経緯を取上げて、その当時の「人ノ心」と対照して現今の「ヒガ事」をする人(その典型が既述した院の近臣、後述する。)の「心」とを慈円は対比する。⁽²⁹⁾そして付録前半の「史」の論で、

児女子ガ口遊トテコレヲオカシキコトニ申ハ、詩歌ノマコトノ道ヲ本意ニモチイル時ノコトナリ。愚癡無

智ノ人ニモ物ノ道理ヲ心ノソコニシラセントテ、仮名ニカキツクルオ、法ノコトニハタバ心ヲエンカタノ
 真実ノ要ヲ一トルバカリナリ。

(巻七——三二二ページ)

と広言していたからには、本書の特性が詠歌の措辞とも重なるのは明白であろう。別帖で『大鏡』に言及したあと、執政の「臣」の貞信公こと藤原忠平の一族の動向を叙述の正面に据える。『大鏡』の語る安和の変をみると、「西宮殿の族に世の中うつりて、源氏の御栄えになりぬべければ、御舅たちの魂深く、非道に御弟をば引き越し申させたまつらせたまへるぞかし。(中略) いとおそろしかなしき御ことども出できにしは。」(「師輔伝」九二)とあり、源高明の女が為平親王の室になっていたので、為平親王が即位すれば源氏は天皇家と外戚関係を築いて政治の実権を掌握する事態へ及んでしまう。そこで藤原摂関家の方としては、為平親王の弟の守平親王を何としても擁立せねばならなかった。そこで藤原実頼と伊尹とが共謀して高明に罪を捏造し、為平親王を奉じて乱をなさんとする謀計があると武士の満仲は伊尹への忠義心から密告した。安和二年(九六八)三月、高明は大宰権帥として配流された。安和の変の顛末である。この密告の恩賞によって、満仲は正五位下に昇進し、藤原摂関家に奉仕することになり、摂津国多田の区域を拠点に軍事貴族として根を張っていった。満仲の七代後が行綱なのである。「世継物語」の系譜に入る『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」の行綱の密告が仕組まれた。『治承物語』を企画・創出させた歌人の慈円は、『愚管抄』のなかで安和の変を重層させつつ、「鹿ヶ谷事件」の実相をも対置して物語の行綱の密告を取り込んだので、「コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、満仲ガ末孫ニ多田蔵人行綱ト云シ者ヲ召テ」(巻四——二四四ページ)として施線のように注記を付し、二重施線では満仲の子孫と明記したのであった。同時に『愚管抄』の二重施線の「満仲ノ末孫」は、『大鏡』の語っていた遠祖の満仲をめぐる安和の変をも慈円が念頭に置いてある筆致でもあるといえよう。

『六国史』や『栄花物語』が編年体であるのに対して、『大鏡』は長生の老人が「ただ今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはしますこと」・「あまたの帝王・后・また大臣・公卿の御上」(「序」三三)と語りだす。比類がない

器量をもつ藤原摂関家の人臣である藤原道長を仰視しながら、天皇・皇后・大臣・公卿達の群像を紀伝体を踏襲して語っていく。『大鏡』では藤原摂関家の栄華は運命的・必然的であるとみなしている。⁽³⁰⁾ そのため「ながく栄えおはしますにこそあべかめれ。冷泉院・円融院・為平式部卿宮と、女官四人との御母后にて、またならびなくおはしましき。帝・春宮と申し、代々の関白・摂政と申すも、多くは、ただこの九条殿の御一筋なり。」(『師輔伝』九〇)とあって、語りの現在まで、師輔の子孫であると揚言している。つづけて「式部卿の宮こそは、冷泉院の御次に、まづ東宮にもたちたまふべきに、西宮殿の御婿におはしますによりて、御弟の次の宮に引き越されさせたまへるほどなどのことも、いといみじくはべり。」と語った。既述したように源高明の女を室にしていた為平親王が、順当ならば冷泉天皇のあとにつづいて帝位に就くはずなのに、師輔の女の子から生誕している弟の守平親王が結局、円融天皇として即位してしまう。施線で実は大変なことでしたと長生の老人は感想を付している。藤原摂関家が天皇家との外戚関係を築いていくうえでの「他氏排斥」があつたわけで、この施線の言辞の背後に、左大臣にうつりたまふこと、西宮殿、筑紫へ下りたまふ御替なり。その御ことの乱れは、この小(一)条のおとどの言ひ出でたまへるとぞ、世の人聞こえし。

(『師尹伝』七二)

とあるように、安和の変が意識されている。しかも二重施線で、安和の変の内実である源高明左遷が惹起したのは、波線部にあるように師尹の讒言であつたとの世評を添える。屢述してきているように安和の変の発端には満仲の密告があつた。『大鏡』の「師輔伝」・「師尹伝」にも依拠した『愚管抄』は「安和二年三月ノコロ、コノ左大臣高明謀反ノ心アリテ、(中略)左馬助源満仲、武蔵介藤善時ナド云、時ノ武士ノサ、ヤキ告ケルコト出来テ、」(巻四——一八〇ページ)として、波線部で高明の娘婿の為平親王を帝位に即けよとした「謀叛ノ心」を叙述している。この一節は現今の安和の変に関する歴史研究の「師尹の侍の多田満仲が師尹への忠義心から、高明等に無実の罪をつくりあげ、師尹の昇進を謀った」との見解とも齟齬してはいない。⁽³¹⁾ 安和の変をめぐる慈円の言説をさらに『愚管抄』に沿って窺うことにしよう。師輔の三男の兼家は、我が女の詮子を円融天皇に入内させて、あいだ

に誕生したのが一条天皇である。このことによつて政権をほぼ確定的に藤原摂関家が掌握する。その当時の治世を、『愚管抄』別帖に、

一條院ノ御時、四納言トノ、シルヌキマダラモナキ四人ハ、齋信・公任・俊賢・行成トテ、四人大納言マデニテ、ツヰニ大臣ニハエナラズ。俊賢コソ、西宮左大臣、延喜御子、一世ノ源氏ニテ、凡人ニナリテ、ユ、シキ人ナリケル、

(巻四——一七九ページ)

としており、当時の廟堂で名臣と謳われた四納言の一人が源高明の子息の俊賢であり、施線で廟堂で重んじられていると明記しながら、安和の変の顛末が詳細に叙述されていく。第六十三代冷泉天皇の治世で起きた政変を、何故に第六十六代的一条天皇の在位する治世で慈円がふれるのかは次の(六)の節で論じることにはしたい。ともかく、この別帖の一条天皇の在位する治世を括る文章中に、慈円が、

四納言ガコヘアイケルヤウナンドモ、ヨキ物語ドモナレド、サノミハカキツクシガタシ。又用ジモナキ事ナリ。

(巻四——一八五ページ)

として、俊賢をはじめとする公任・齋信・行成等が官位を競い合っている「物語」があるものの書き尽くし難い、また道理を説く史論であるので必要ではないと注記していた。この二重施線の「物語ドモナレド」の言辞は、第八十代高倉天皇の条にある既述した「句」の「清盛伝」にも、

邦綱ガムスメ嫡女ヲ御メノトニシタリケリ。大夫三位トテ成頼ガ妻ナリ。成頼入道方出家ニハ物語ドモアレド無益ナリ。

(巻五——二四三ページ)

とやはり同じように慈円は注記する。ところが、成頼の出家をめぐる「物語」は長門本『平家物語』に、

聖一人あり。
そのさまを御らんずれば、

こき墨染の衣の上に、ゆひ袈裟をこそかけられたれ。

髪すこしおひのびて、護摩の煙にふすぼり、薫じかはれるありさま、かくこそあらまほしくおぼしめされけれ。

あれを見、是を御覧するにも、

閑居のありさま、御心にはかなはずといふ事なし。

此聖と申は、是は、近来、成頼の宰相とて、天下に聞えし賢人なり。

世の中のなり行あり様を、心うく思て、

「従大中納言、正二位を経てまなにかはせん」とて、

いまだ四十にもなりたまはざりしに、

出家して、高野、粉河をめぐられるが、

これはすこしすぎき所なりとて、行すましておはしけり。

(巻二十「灌頂巻」)

と確かに語られている。慈円と『治承物語』の創出から留意せねばならない。『愚管抄』には『治承物語』を取用しているので、「出家ニハ物語ドモアレド無益ナリ」には、すでに存在している「物語」おそらく成頼の出家めぐる話柄が『治承物語』に組み込まれていたと思われる。そのことは『愚管抄』別帖の冒頭で「……世継ガモノガタリト申モノヲカキツギタル人ナシ。」(巻三——二九ページ)と広言するからには、同時代以前の治世を対象にした『大鏡』・『今鏡』を慈円は見据えている。そしてこのような「世継物語」には確かに四納言の活躍した説話が語られている。このことも次の(六)の節で後述しよう。要するに四納言の源俊賢をめぐる「ヨキ物語ドモナレド」とは、後述するように俊賢の様々な活躍を語る「世継物語」を「本説」にした慈円の注記といえよう。『愚管抄』は道理を説論する立場から「理」で枠付けしながらも同時に「情」も介在する。すなわち歌人の心情が随所に充溢する。約言すれば、歌の修辞の本説取りが『愚管抄』に襲用されたのである。

冷泉天皇の治世の廟堂で重きをなしていた左大臣源高明が太宰府に左遷させられた安和の変の要である藤原摂関家による「他氏排斥」が安和二年（九六九）三月にあった。その三代後である一条天皇の条で道長に臣従している高明の子である俊賢の活躍を語って「物語ドモアレド」と『愚管抄』に注記した。同時代に推移させて第七十四代の鳥羽院崩御の保元元年（一一五〇）からの「武者ノ世」（巻四——二〇六ページ）を叙述していく慈円は、第八十代高倉天皇の条に及べると自己が企画・創出させた『治承物語』に治承元年（一一七〇）の「鹿ヶ谷事件」を取用して「コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、満仲方未孫ニ多田藏人行綱ト云シ者ヲ召テ」（巻四——二四四ページ）とやはり注記するのである。高倉天皇の条での成頼の出家をめぐる「物語ドモアレド」とある注記に顧慮したならば、「言葉の型」の一部を引用する類型的縁語であつて、俊賢をはじめとする四納言の活躍した一条天皇の在位していた時より約百八十年の時空を横断させて慈円は道理を説論していると思われる。このことからみると、満仲の密告で引き起こされた安和の変から「鹿ヶ谷事件」の満仲の子孫すなわち多田藏人行綱の密告までは約二世紀半の歳月が経過しているものの、やはり冷泉天皇の治世から高倉天皇の在位している治世での「鹿ヶ谷事件」の時空を横断させて、満仲の密告をもとに仕組まれた『治承物語』の多田藏人行綱の密告を取用しながら『愚管抄』で道理を説論していると思われる。そこには『新古今集』の代表的歌人として慈円の修辭が介在しているはずであろうことをさらにみていこう。

（六） 執政の「臣」の道長と安和の変

『愚管抄』別帖の一条天皇の在位する治世に「四納言ガコヘアイケルヤウナンドモ、ヨキ物語ドモナレド」の言辭があり、四納言の一人である俊賢をとりわけ慈円は重視している。

『愚管抄』には、

其後、内大臣ニテ伊周、モト内覧ノ宣旨カウブリタル人ニテアリケルニ、大納言ニテ御堂ハオハシケルハ、

(中略) イモウトノ女院、當今ノ母后ニテ、ヒシトカクオボシメシタリケルヲ、主上ノ思フヤウニモ御ユルシナクテアリケルホドニ、イタク申サレケルヲウルサクヤオボシメシケン、アサガレイヒヲタ、セ給テ、ヒノ御座ノカタニオハシマシテ、藏人頭俊賢ヲ御マヘニメシテ、御モノガタリアリケル處へ、ヨルノヲトゞノツマドヲアケテ、女院ハ御目ノヘンタゞナラデ、「イカニヨノタメ君ノタメヨク候ベキコトヲカク申候ヲバ、キコシメシイレヌサマニハ候ゾ。コノギニ候ハバイマハナガクカヤウノコトモ申候マジ。心ウククチオシキコトニ候モノカナ」ト申サセ給ケルトキ、キナヲラセ給テ、「イカデカコレホドニヲホセラレンコトヲバ、イナビ申候ベキ。ハヤクオホセクダシ候ハン」ト、内ノ御気色モマメヤカニナリテオホセラレケレバ、女院ノワタラセ給ト心エテ、御前ニ候ケル俊賢タチノキケルヲ、「サラバヤガテ藏人頭俊賢候メリ、メシオハシマセ。申キカセ候ハン」ト申サセ給ケレバ、「ヤ、トシカタコレヘマイレ」トメシケレバマイリタリケルニ、女院ノ、「大納言道長ニ太政官文書ハ奏セヨト、トクオホセクダセヨ」ト仰ラレケレバ、俊賢タカクキセウシテマカリタチテ、ヤガテ仰下ケレバ、……

(巻三——一七〇〜七一ページ)

とあるように、道長に執政の「臣」の宣旨を下すように道長の姉の詮子が懸命になつて一条天皇へ詰め寄っている。史論でありながら物語のように精彩を放っている。というのは、当該場面は『大鏡』にも、

……されば、上の御局にのぼらせたまひて、「こなたへ」とはせ申させたまはで、我、夜の御殿に入らせたまひて、泣く泣く申させたまふ。その日は、入道殿は上の御局にさぶらはせたまふ。いとひさしく出でさせたまはねば、御胸つぶれさせたまひけるほどに、とばかりありて、戸を押し開けて出でさせたまひける。御顔は赤み濡れつやめかせたまひながら、御口こころよく笑ませたまひて、「あはや、宣旨下りぬ」とこそ申させたまひけれ。

(『道長伝』一八〇)

とあつて、施線で泣く泣く天皇に弟の道長を「臣」にしてほしいと懇請し、ついに天皇からの宣旨が下ったので

二重施線にあるように歎喜している詮子を語っていた。詮子的心情表現に比重が置かれているが、物語としては『愚管抄』の方が『大鏡』より数段上の印象深い状況である。刮目すべきは俊賢の名が五回も繰り返されており、道長の側近として活躍していることを押し出すのである。藤原摂関家と外戚関係がない後三条天皇が、藤原師実の女の賢子入内を決断、その朗報を伝えるために師実が宇治に隠棲している父の藤原頼通の許へ行く場面（巻四——一九六〜一九九ページ）に匹敵する白眉の場面構成であろう。特に留意したいのは、当該の場面には『大鏡』では俊賢の登場がないことである。ここに慈円の独自の道理史観が通底している。そのことは、

イマソノ子俊賢ハ又コトニ／＼御堂ニハシタシク候テ、イササカモアシキ意趣ナカリケリ。ヨキ人ニナリヌレバ、ヒガゴトハ思ヘレドモ、ヤガテ思ヒカヘシ、又ムヤクノアシキ意趣ナドフカクムスブコトヲセヌナリ。サテコソワレモ人モヲダシキ正道トハ云コトナレ。アヤマレルヲアラタムルノ善ノ、コレヨリヲホキナルナシト云明文ハ、カヤウノコトナルベシ。大方御堂ノ御世ニハ、ヨロヅノ人ソノ心ノヲハシケルアリサマノ、スク／＼ト私ナク、當時タゞヨカルベキヤウノホカニ、又ヤウモナクハカライサダメヲハシケルニ、ヨロヅ皆キ、テ、人モナビキ帰シ申タリケルヨト、アラハニミユルナリケル。

（巻四——一八〇〜一八一ページ）

として、安和の変当時では、すでに十一歳の俊賢であったので父の高明が配流されていく惨事を暇に焼き付けていたはずであるが、施線では道長の領導している現今の治世でその苦悶の意趣が俊賢には無いばかりかむしろ道長に臣従していると慈円は力説している（このことは『愚管抄』の文章に明記されており、後述）道長が「臣」に就くための宣旨を下すように詮子が天皇の詰め寄る場面に俊賢を大きく押し出した慈円の意図は、二重施線にあるように道長の領導した治世の特質を標榜しようとしているからに他ならない。道長と俊賢の主従関係を末代の治世で指標すべきであると鋭く説諭する。これは「世継物語」の方法である。すなわち『大鏡』には「すべらぎのあともつぎづきかくれなくあらたに見ゆる古鏡かも」（後一条院伝三三）との歌を配し、代々の天皇の事蹟も次々と順を追って、隠れなく、新しく映し出し、歴史の真実を顕すと作者は表明した。『大鏡』を承けている『今鏡』

でも「古をかがみ、今をかがみるなどいふ事にてあるに、古もあまりなり。今鏡とやいはまし」(序)とあつて、趣向としての紫式部に仕えた老嫗の回顧談から『白氏文集』の「太宗ハ常ニ以テ人ヲ為シレ鏡ト、鑑ミテ今ヲ不レ鑑ミレ容ヲ」の教えを作者を宣揚している。要するに『愚管抄』の方がより濃厚な「鑑戒」なのである。

忌わしい安和の変にまつわる親の世代の禍根には全く恬淡として、甲斐甲斐しく道長に臣従している俊賢を『愚管抄』では押し出した。執政の「臣」としての道長とその廷臣として俊賢との麗しい主従関係を見事に捉え、末代から将来の人々の生き方に資するように慈円は仕組んだといえよう。

次に『治承物語』に取用している『愚管抄』との関係をも配意しつつ、俊賢をはじめとする四納言をみることにしよう。『治承物語』と同様に同時代を対象にした『今鏡』には、

また少将時叙と聞え給ひし源氏の、一条のおとどの御子、大原の御室など聞えて、やむごとなき真言師おはしき。

また村上の兵部卿致平の御子の成信の中将、また堀河関白の孫にやおはしけむ、重家の少将とて、左大臣のひとり子におはせし、もろともに仏道に一つ御心に契り申し給ひて、三井寺の慶祚阿闍利の室におはして、

「世をそむきなむ」とのたまひければ、

「名高くおはする君だちにおはするに、びんなく侍りなむ」と否び申しけれども、かねて御髪をきりておはしければ、慶祚阿闍利許し聞えてけり。照中将、光少将など申しけるとかや。中將は二十三、いまひとりは二十五におはしけるとかや。

行成中納言の御夢に、重家の消息とて、

「世をそむきなむ」といふことのたまひけるを、御堂の大臣の御許におはしあひて、

「かかる夢こそ見侍りつれ」と語り聞え給ひければ、少将うち笑いて、

「まさしき御夢に侍り。しか思ふ」などのたまはせける。次の夜、寺の大阿闍利房へおはしたりけるとなむ。年ごろの御ころざしのうへに、時の一の人のわづらひ給ふだに、人もたゆむこと多く、世の頼みなきやう

におぼえ給ふことの心細くおぼえ給ひて、さばかり惜しかるべき君たちの、その御年のほどに思ほしとり、行ひすまし給へりし、あはれなどいふも、こともよろしかりしことぞかし。

このことを、また人の申し侍りしは、

「齊信、公任、俊賢、行成と聞え給ひし大納言たち、陣の座にて、世の定などし給ひけるを立ち聞き給ひて、『位高くのぼらむと思ふは、身の恥を知らぬにこそありけれ。かやうに世の定めなどせむことも、え及ぶべくもおぼえず。後の世をぞ思ひとるべかりける』など思ひて、出で給ひける夜、重家の少将、御親の大納言にいとま申し給ひけるを、おほかたとどめらるべきけしきもなかりければ、えとどめ給はざりける」とも聞え侍りき。行成大納言の御日記には、さきに申しつるやうにぞ侍なる。これは異人の語り侍りしなり。四条大納言公任の御歌など侍りしかとよ。御集などには見え侍らむ。

(藤波の中・第五「吾の衣」)

とあり、四納言の器量を際立てる話柄である。施線にあるように四納言が陣の座の会議で学才を発揮しあつてゐる様子をたつたままこつそり聞いていた「照中将」こと二十三歳の成信と「光中将」こと二十五歳の重家は衝撃をうける。成信も重家も比類ないほどに優れ、将来を嘱望されていたが、「高位にのぼろうと思つのは恥を知らないのと同然である、俗世にいても何になろう」との思いをつのらせて出家したのであった。本説話は『続古事談』・『発心集』にも収載してゐるので、慈円の在世している廟堂内外にも流布してゐたことであろう。学才の評判が高かつた行長が、後鳥羽院の御所の高陽院で『白氏文集』の「御論義」で失態、遁世して比叡山延暦寺の別所の西山に赴いた。その西山の空間に慈円圈が組織されて、『治承物語』を創出していくのに参画した。本説話を行長をはじめとして慈円圈にいる他の縋素も大いに氣にとめていたと想定されよう。本説話が『愚管抄』に取用されてゐるからである。すなわち、

四納言サカリノトキ、テル中将、ヒカル少将トテ、殿上人ノメデタキアリケルハ、中将ノテ、ハ兵部卿ノ宮、母ハタカツカサ殿ノアネニテアリケレバ、御堂ノ御子ニナリテ成信トゾナハ申ケル。少将ハアキミツノ左大

臣ノ子ナリ。重家トゾ申ケル。コノ二人仗儀ノアリケルヲ立聞テ、四納言ノ我モくト才覚ヲハキツツサダメ申ケルヲ聞テ、「ワレヲ成アガリナン後アレラガヤウニアラシズルガ、ヲトリテハ世ニアリテモ無益ナリ。イザ佛道ト云道ノアンナルヘイリナン」トテ、カイナシテ、二人ナガラ長保三年二月三日出家シテ、少将入道ハ大原ノ少将入道寂源トテ、池上ノアザリノ弟子ニテ聞ヘタル人ナリ。中将入道ハ三井寺ニテ、御堂ノ御薨逝ハ時ニモ、善知識ニ候ハレケルナドコソ申ツタヘタレ。トニモカクニモヨキコトノミ侍リケル世ニコソ。

(巻五——一八一〜八二ページ)

とみえる。西山と同じ別所の大原や三井寺が舞台とされている。ここには慈円の錯誤も介在している。それは二重施線部で重家少将を大原少将としているのは『今鏡』の二重線部の「大原入道」と呼ばれた少将時叙と少将重家との混同であつて、『今鏡』の説話を念頭に慈円は置いているからであつた。³²⁾ 重家の言動を叙述しつつしかも具体的に出家した年月日を付し、しかも四納言が仕えた道長の逝去の際の全知識であつたことも付言して括つている。「鑑戒」となるように道理史観から組み替えたので錯綜している。要するに晦渋な文章となつてゐるわけである。

『今鏡』をもとに『愚管抄』では、安和の変後の人間関係を叙述して「……ネブカクサヲモフトモ、シフベキコトナラネバ、人モカクサタスナドヲモイテ、メシカヘサレニケルナメリ。イマソノ子俊賢ハ又コトニく御堂ニハシタシク候テ、イササカモアシキ意趣ナカリケリ。ヨキ人ニナリヌレバ、ヒガゴトハ思ヘレドモ、ヤガテ思ヒカヘシ、又ムヤクノアシキ意趣ナドヲフカクムスブコトヲセヌナリ。サテコソワレモ人モヲダシキ正道トハ云コトナレ。(中略) 大方御堂ノ御世ニハ、ヨロヅノ人ソノ心ノヲハシケルアリサマノ、スクくト私ナク、當時タバヨカルベキヤウノホカニ、又ヤウモナクハカライサダメテヲハシケルニ、ヨロヅ皆キ、テ、人モナビキ帰シ申タリケル……」(巻四——一八〇〜八一ページ)とあつて、父の高明が藤原摂関家に追い落とされた時は十歳であつた俊賢は、その政変を幼心に焼き付けたはずである。が、その後には信任されて道長と俊賢との麗しい主従関係を築いてゐると道理史観から把握したのであつた。換言すれば、一条天皇の在位する治世領導してゐる道長の所業に関連して、三代前の冷泉天皇の時にあつた安和の変の顛末を詳述することで、「御堂ト云誠ノ賢臣ソノ世ニヲハセ

ズハ、アヤウカルベカリケル世」(巻四——一八三ページ)と展開させた。それを慈円自身が生きている現今末代の治世に引き寄せて、

一ノ人モアルマジ。コレヲ又カクミシリテモチイル臣家モアルマジ。カ、ル器量ドモノアイクヌル世ヲ、ナドミザリケントノミシノバルレドモ、サラニ云カイナキスヘノ世ナレバ、思ヒヤルカタナシ。

(巻四——一八一ページ)

として、現実を直視しながら二重施線にあるように慈円は慨嘆している。この筆致にも「世継物語」の方法がある。器量をもつ「一ノ人」すなわち執政の「臣」である道長を追懷している慈円が歴然であるからには、「愚癡無智ノ人」をはじめとして末代現今から将来の人々の心に差し入れる「鑑戒」としてやはり叙述したのであった。『愚管抄』の「四納言ガコヘアイケルヤウナンドモ、ヨキ物語ドモナレド、サノミハカキツクシガタシ。又用ジモナキ事ナリ。」(巻四——一八五ページ)の言辭と、俊賢らの四納言の器量を見て成信・重家とが一緒に出家した説話とが『愚管抄』に併記されていることは看過できない。すなわち『大鏡』に語られている四納言に関する物語へ傾斜させる慈円の思念は、同時代史に及ばせるときにはやはり施線の「物語」すなわち『今鏡』の後を引き継ぐ「世継物語」の『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」にも俊賢の父・高明配流の直接の原因となった満仲の密告が活用するであろうと思われるからである。

安和の変をめぐる高明の子とその俊賢を媒介にして、藤原摂関家の道長の世より「武者ノ世」である現今末代までが『愚管抄』では鳥瞰されている。その一方、延慶本『平家物語』に、

冷泉院御位ノ時、ウツ、御心モ無ク物狂シクノミ御坐ケレバ、「長ラヘテ、天下ヲ知食事イカヅ」ト思ヘリケルニ、御弟ノ染殿ノ式部卿ノ宮、西宮ノ左大臣ノ御簪ニテ御坐シケリ。「ヨキ人ニテ渡ラセ給」ト人思ヘリ。中務少輔橘敏延、僧連茂、千晴ナドガ、「式部卿宮ヲ取奉テ、東国ヘ趣テ、軍兵ヲ語ツ、位ニ即奉ム」ト、右近馬場ニテ、夜ナノ議シケルヲ、多田満仲比由ヲ奏聞シタリケレバ、西宮殿ハ被レ流給ニケリ。西宮殿ハ知給ハザリケルヲ、敏延ハ、「播磨国給ハラム」、連茂ハ、「一度ニ僧正ニ成ラン」ナド思テ、カ、ル事ヲ

思ヒ立ニケリ。満仲モ語ハレタリケルガ、(中略) 此事ヲバ小一条ノ左大臣師尹ノ殊ニ申沙汰シテ、西宮左大臣流シテ、其カハリニ大臣二八小一条院ノ成給タリケルガ、

(二中・二六「後三条院ノ宮事」)

とあつて師輔の女から誕生した冷泉天皇から、高明の左遷の顛末を概括して施線部で満仲の密告が明確に語られたのであった。前掲したように治承三年(一一八〇)十一月のクーデターによつて執政の「臣」である松殿基房が配流に関連して、屋代本に、

大臣流罪ノ例ハ、右大臣曾我赤兄、右大臣豊成、左大臣魚名、菅原右大臣、今ノ北野天神也、左大臣高明、
……

(巻三・「入道相国奉恨朝家事同悪行事」)

とあることから、安和の変の顛末が『新古今集』の代表的歌人慈円にはイメージされていたはずである。慈円だけではなく、すこしでも故実を弁えている人ならば「左大臣高明」の左遷から満仲の密告の顛末が脳裏に湧き出してくるにちがいない。菅原道真を遠祖とする学儒の為長また行長はじめとする慈円圈に集っている人材ならば、学を好んだ高明そして子の俊賢に親愛の情をつのらせたのは疑う余地はあるまい。二重施線にある「左大臣高明」の配流の直接の原因となつた満仲の密告をもとに「あそび心」から行綱の密告を『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」を虚構化するのは自然の成り行きであろう。

『愚管抄』の一条天皇の在位している治世に三代前の冷泉天皇の在位していた世に惹起した安和の変を詳述することで、他方、慈円は賢臣である執政の「臣」の道長と道長に臣従している俊賢との麗しい君臣関係を現現代から将来の人々の心に差し入れるのである。

(七) 諸大夫の光頼とその子息そして成親へ

『愚管抄』の「清盛伝」の「句」には、

我身ハ太政大臣ニテ、重盛ハ内大臣左大将ニテアリケル程ニ、院ハ又コノ建春門院ニナリカヘラセ給テ、日本國女人入眼モカクノミアリケレバ誠ナルベシ。先ハ皇后宮、ノチニ院号國母ニテ、

(巻五——二四三ページ)

とあることが、「永萬元年八月十七日二清盛ハ大納言ニナリニケリ。」(巻五——二四二ページ)とあつて、国政に参画することになった清盛は、次第に廟堂に権力を拡大させて「思フサマニ入道、帝ノ外祖ニ成ニケリ。」(巻五——二四四ページ)として天皇の外祖父となる。そのようになった根拠が「女人入眼」の道理であつたのである。この道理が通つていた十四年間の治世なかには、平家一門を批判する貴族の動きには全くふれることはない。当該の文章を叙述している慈円は、後白河院と平清盛との協調のなかに推移していった歴史時間として縁取つて、徐々に廟堂で威勢をはつて、ついに天皇家と外戚関係を築いてしまふまでの清盛の所業が跡付けている。「清盛伝」と称せる句となつてゐる。この「清盛伝」に直結しているのが「鹿ヶ谷事件」の「句」なのである。その始発になる『愚管抄』の文章は、

カクテ建春門院ハ安元二年七月八日瘡ヤミテウセ給ヒヌ。ソノ、チ院中アレ行ヤウニテスグル程ニ、院ノ男ノヲボヘニテ、成親トテ……

(巻五——二四四ページ)

であつた。これまでの道理の根拠となつていた「女人入眼」の当人である建春門院滋子が世を去つたので、施線のように「院中」すなわち「後白河院の領導する廟堂」に亀裂が入る。そして二重施線にあるように後白河院の寵臣の藤原成親が叙述の正面にせり出してくる。鹿ヶ谷の山荘での平家討伐の首謀者の成親への清盛の厳しい処断へ及ばせた慈円は、

成親ノ大納言ヲバヨビテ、盛俊ト云チカラカアル郎從、盛國ガ子ニテアリキ、ソレシテイダキテ打フセテ、ヒキシバリテ部屋ニ押籠テケリ。公卿ノ座ニ重盛ト頼盛ト居タリケル所へ、「何事ニカメシノ候ヘバ參テ候」トテ、諒闇ニテ建春門院母后ニテウセ給テ後ノ事ニテゾ、諒闇ノナヲシニテ、ヨニヨクテキタリケリ。「出候ハンニコマカニ見參ハセシ」トテアリケルヲ、ヤガテカクシテケレバ、重盛モ思モヨラデアキレナガラ、コメタル部屋ノモトニユキテ、コシウトノムツビニヤ、「コノタビモ御命バカリノ事ハ申候ハンズルゾ」ト云ケリ。サヤウナリケルニヤ、備前國ヘヤリテ、七日バカリ物ヲ食セデ後、サウナクヨキ酒ヲ飲セナドシテヤガテ死亡シテケリ。

(巻五——二四五ページ)

としたのであった。成親の助命を嘆願する重盛にふれ、さらに成親の配流そして惨殺の顛末を叙述する。物語でも「小松殿、「イカニヤ」ト宣タレハ、其時目ヲ見開テ、ウレシケニ被^レ思タル景氣、地獄ニテ地藏菩薩ヲ罪人共カ見奉リタル覽モ是ニハ過シトソ見シ。」(巻二「重盛卿父禪門諷諫事」とし、つづけて清盛に重盛は今宵の処刑をとりあえずは断念させたと語っており、右文の二重施線に対応する。その後、波線部にあるとおり配所となった備前に追い遣られ、施線では物も食べさせないで置かれたのちに強い酒を飲ませられたと叙述した。成親死去をめぐる本事象を物語の方では「酒ニ毒ヲ入テ勸奉ケレトモ叶ハサリケレハ、岸ノ二丈計有ケルシモニヒシヲウヘテ、其二突落シ、ヒシニツラヌキ奉テ失ケルトソ聞ヘケル。」(巻二「成親禪門逝去事」としている。『愚管抄』の右文の施線で「酒」の語を具体的に取り込んで成親が死去したとしているのと確かに照応する。むしろ『治承物語』に依拠しつつ独自の改変が施され、史論も凄惨な最期を摘記した。したがって『愚管抄』の「清盛伝」につづく当該の「句」は「成親伝」と称せるだろう。この「成親伝」を縁取っているのは廟堂の動揺である。王法の荒廃を濃厚に叙述することによって、『治承物語』の中核である「頼朝の物語」を採用しながら、源頼朝が王法に参入してくる道理を説き始める発端を鮮明にする「句」が「成親伝」であった。換言すれば、直前の「句」の「清盛伝」での「女人入眼」の道理から、次の頼朝をめぐる「句」へ及ぼせる媒介の最初の「句」が「鹿ヶ谷事件」

にして「成親伝」なのであった。そのことを『愚管抄』全体の叙述からみておこう。

『愚管抄』の付録で七期に歴史を区分して、

五、初ヨリ其儀両方ニワカレテ。ヒシ／＼ト論ジテユリユクホドニ、サスガニ道理ハ一コソアレバ、其道理ヘイ、カチテヲコナフ道理ナリ。コレハ地體ニ道理ヲシレルニハアラネド、シカルベクテ威徳アル人ノ主人ナル時ハコレヲ用ル道理也。コレハ武士ノ世ノ方ノ頼朝マデカ。

(巻七——三三五—二六ページ)

との道理史観があり、この第五期の文章から窺っていく必要がある。別帖の文章では「武者ノ世」としたのは、保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本國ノ乱逆ト云コトハヨコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。コノ次第ノコトハリヲ、コレハセンニ思テカキヲキ侍ルナリ。

(巻五——二〇六ページ)

であった。この周知の言辞から廟堂の内紛を挾つて、頼朝の父の義朝をはじめとする武士の動向を叙述していく。そして正面に武力衝突を押し出すにあたり、

サレバ世ヲシロシメス太上天皇ト、撰錄臣ノヨヤノサキノ関白殿、トモニ、アニヲニクミテヲト、ヨカタヒキ給テ、カ、ル世中ノ最大事ヲオコナハレケルガ、世ノスエノカクナルベキ時運ニツクリアハセテケレバ、鳥羽院、知足院一御心ニナリテシバシ天下ノアリケルヲ、コノ巨害ノコノ世ヲバカクナシタリケルナリ。サレド鳥羽院ノ御在生マデハ、マノアタリ内乱合戦ハナクテヤミニケリ。

(巻五——二一六—一七ページ)

と副詞「サレバ」・「サレド」とを交互に使い分けながら論理を展開させて、治天の「君」である鳥羽院が在世していたので乱は抑止されていたといい、

カクテ鳥羽院は久寿ヲ改元シテ四月廿四日ニ保元トナリニケリ。七月ノ二日ウセ給ヒケル。

(巻五——二二七ページ)

としたのであった。保元元年（一一五〇）七月二日に院が崩御した事象をうけて、梓で括った副詞「カクテ」を用いて保元の乱の武力衝突そのものの顛末が、以降に詳述されはじめる。この別帖での内容は付録の「史」の論にも再説され、

サレドモ鳥羽院ハ最後ザマニヲボシメシリケン、物ヲ法性寺殿ニ申アワセテ、ソノ申サル、マヽニテ、後白河院位ニツケマイラセテ、立ナヲリヌベキトコロニ、カヤウニ成行ハ世ノナナルマジケレバ、スナハチ天下日本国ノ運ノツキハテ、大乱ノイデキテ、ヒシト武者ノ世ニナリニシ也。

（巻七——三三五ページ）

とあって、文章の構造からは同一である。「武者ノ世」の内実を宣揚していこうとしている慈円の激しい情念がうずいている。^{〔33〕}当該の「鹿ヶ谷事件」の始発に据えられている「カクテ建春門院ハ安元二年七月八日瘡ヤミテウセ給ヒヌ」とある文の副詞「カクテ」は、保元の乱を詳述するにあたっての副詞「カクテ」とは全く同じ機能をしている。鳥羽院崩御が保元の乱の勃発の直接の原因であった。前の「句」の「清盛伝」での「女人入眼」の道理が通じなくなったことで、「鹿ヶ谷事件」が引き起こされた。この事象は建春門院滋子死去が直接の原因であると慈円は道理史観に則って説論する。したがって鳥羽院崩御による保元の乱勃発と同じ論理展開なのである。またこの事象を歴史研究の側からも、すでに元木泰雄が、

女院の死去によって後白河と清盛との調整役が失われ、すでに伏在していた人事の対立が鋭敏化したことは言をまたない。彼女の死去をきっかけに後白河・成親・重盛らと平清盛や平氏一門との対立は、ついに大規模な政変となつて爆発することになる。千僧供養のわずか三ヵ月の後の六月には、供養に列席した院近臣・近習たちの多くが、清盛によって捕らえられ、あるいは殺され、あるいは流される運命にあった。いわゆる鹿ヶ谷事件が勃発するのである。^{〔34〕}

と論じているので、史実からも本事象をめぐる慈円の把握は正鵠を射ていることにはなろう。また『平家物語』のテキストの構成をめぐる美濃部重克は、

「平家物語」の作品世界は、何ゆえに平家が滅びなければならなかったのか、という問題の解釈に帰する様々のレベルの解釈によつて織りなされていると言つてよからう。そしてそれは、「愚管抄」に示された王法観に近い、王法創始の時ににおける天照大神と天兒屋根命の約諾という王権と攝籙権の一種の神授説に王法の根柢を求めようとする王法観をその根本の解釈原理としていられると思われる。(中略) 鹿谷のプロットは「平家物語」のテキストにおいて重要な位置を占めているように思われる。(中略) 鹿谷のプロットとテキスト全体との相似的な関係が「平家物語」のテキストに本来的に内在するものであつたことを示す。⁽³⁵⁾

と指摘していた。『愚管抄』にも言及しながら、美濃部は『平家物語』では登場人物の藤原成親を中心に展開する一連の物語には、平家一門の悲劇を先取るテキストの相似形が内在しているとみている。この美濃部の見解からも『愚管抄』の「鹿ヶ谷事件」にして「成親伝」でもある当該の「句」と『治承物語』が語る「鹿ヶ谷事件」とは同心円が画けることになり、『愚管抄』の文章から『治承物語』の成親が抽出されるはずである。

物語を屋代本に沿つてみていくと、右大将をめぐる藤原成親と平宗盛の抗争から山荘の鹿ヶ谷の密議へ及ばせて、

新大納言、多田藏人ヲ呼テ、「御辺ヲハ一方ノ大将ニ憑ムナリ。シヲウセツル物ナラハ、国ヲモ庄ヲモ所望ニ可シ随。先弓袋ノ料ニ」トテ、白布五十端被レ送ケリ。

(卷一「新大納言成親卿以下謀叛事」)

として、その後には白山騒動にともなう延暦寺衆徒との動きから仏法の動揺、そして「内裏焼亡事」という王法の動揺を語つて物語の巻第一は閉じられている。巻第二では、白山騒動すなわち加賀国の国司であつた師高は院の近臣である西光の子であつたが、国衙領の侵犯から白山の衆徒等と対立し、激しい抗争を続けており、目代として事にあたつていた師高の弟の師経が、逃げ帰り、院の庁に訴えたと言ふ。一方、白山の衆徒等は神輿を本山の比叡山延暦寺にかつぎ上げて強訴を求めた。そこで院の庁と山門との紛争が勃発する。後白河院は院宣をもつて軍兵を召集して山門を攻めようとされていると言ふ。このようにして仏法と王法とが危殆に瀕していく時局

の実相をも踏まえて、本物語では行綱密告が虚構されたのである。その場面は、

新大納言成親卿ハ、依^テ山門騒動ニ私^シノ宿意ヲハ暫クヲサヘラレケリ。ソモ内議之支度ハ様々成シカ共、義勢計ニテ此事可^クレ^フモ見サリケレハ、宗ト憑^レシ多田藏人行綱、此事無益成ト思^フ心ソ付ニケル。成親卿ノ方ヨリ弓袋ノ料ニトテ送^ラレタル白布共、家子郎等力直垂ニ裁着テ居タリケルカ、情見^ヅニ平家繁盛^ヲ一、輒^タク難^シ傾ケ、無^キレ由事ニ与^キシテムケリ、若此事漏ヌル物ナラハ、行綱先^ツ失^シナハラナムス。他人ノ口ヨリ洩^モヌサキニ返^リ忠ウシテ、命イカント思^フ心ソ付ニケル。五月廿九日夜深人静テ、入道相国ノ宿所西八条ヘ行向テ、「行綱コソ可^キニ申入^レ」事候テ、参テ候ヘ」ト申入タリケレハ、「アレ何事ソ。聞ケ」トテ、主馬判官ヲ出サレタリ。……

(巻二「成親卿以下謀叛多田藏人行綱忠言事」)

と語られている。『愚管抄』の当該の「句」を対置しながらみていこう。まず謀議の発端は、内大臣で左近衛大將を兼ねていた妙音院師長が左大將を辞任したことで、後任のポストをめぐって意欲をもやすのが、徳大寺大納言実定・花山院中納言兼雅そして成親であった。が、曾我良成は大將のポストを所望した成親は「院近臣として勢力をふるった六条顕季の曾孫にあたる。(中略)一族に大將に任命された人物はいない。(中略)成親のようないわゆる諸大夫家にはおよびもつかない地位であった。(中略)文学の虚構である。」と指摘している。⁽³⁶⁾当時の『玉葉』等の史料をもとにしても成親が望んだ形跡はない。「此大納言非分ノ大將ヲ祈申サレケレハ」と物語では語り、「桜花賀茂ノ河風ウラムナヨ散ヲハエコソト、メサリケレ」との歌や落雷をもとに成親の望みは納受できないと冥衆からの成親への通告を仕組み、つづいて清盛の長男の重盛が近衛大將に昇格し、次男の中納言でしかなかった宗盛が数人の先輩を追い越して右近衛大將に拔擢された史実を配して、平家一門の打倒を決意する成親を「只天魔ノ所為トソ見ヘシ。」と語っている(巻一「新大納言成親卿以下謀叛事」)。「冥」と「顕」との両面から成親の望みは作為されている。この物語化は『愚管抄』の「冥顕二法」の道理と相即する。したがって慈円圏で「いくさ物語」として安元二年七月より後白河院と院の近臣側と平清盛が率いる一門とが次第に疎隔しはじめ、平宗盛が就任し

たのを怨んだ成親が平家討伐を企てると仕組まれた虚構であった。

『愚管抄』付録後半の人材論には、摂関家・清華家・大臣家の器量ある公卿を列举して、四位・五位程度に補せられる家柄である諸大夫家に及ばせ、

諸大夫ニハ顯季カ末ハ隆季・重家……（中略）……光頼大納言カツラノ入道トテアリシコソ、末代ニヌケイデ、人ニホメラレシカ。二条院時ハ、「世ノ事一同ニサタセヨ」ト云仰アリケルヲ、フツニ辞退シテ出家シテケルハ、誠ニヨカリケニヤ。タバシ大納言ニナリタルコトコソヲボツカナケレ。「諸大夫ノ大納言ハ光頼ニゾハジマリタリ」ナンド人ニイハルメリマデ也。カ、ラン人ハナラデ候ナンドヤ思フベカラン。昔ハ諸大夫ナニカト器量アル士ヲバサタナカリ。サヤウノコロハ勿論也。ヒサシクカヤウノ品秩サダマリテ「諸大夫ノ大納言ミツヨリニハジマリタル」ナドイハル、事ハ、上品ノ賢人ノイハルベキ事ニハナキゾカシ。末代ニハコノ難ハアマリ也。（中略）ムマレツキヨリ父祖ノ氣分ノ器量ノケツリスデ、ナキニ、ムマゴドモニナリテハ、當時アル人々ニテアレバ、トカケヨキ人トモ、ワロキ人トモニタランヌ事ニテ侍也。

（巻七——三五——五二ページ）

とあるように、まず西山の慈円圏に近い区域にある桂の里に隠遁したので「桂大納言」と称された藤原光頼（二二三〜二七三）は諸大夫家の出身であったから、二条天皇の治世で政治を担当するように命ぜられたが辞退したのは評価できると讃える。つづけて身分秩序の建前から、施線では正三位の大納言の公卿に就いたのは不審とされようが、二重施線で光頼その人があまりにも明晰な頭脳と合理精神にも長けている突出した有能な人臣であったと慈円は弁明した。光頼の大納言の就任を末代の道理から把握したのであった。他方、陽明文庫本『平治物語』にも光頼は語られている。弁舌する光頼を周囲の人々は「あはれ、大剛の人かな」と讃え、

この人を大将として、合戦をせばや。いかば頼もしからん。昔の頼光を打ち返して、光頼と名乗りばやたまへば、

（上巻「光頼卿参内の事」）

とあつて多田満仲の子の頼光を引き合いに出している。その後、平治の乱の謀叛に加わったと我が子の惟方を公然と「いかばかり然るべからざる振舞いかな」・「……はなはだ穩便ならず」と諫めて、

……人臣の王位を奪ふ事、漢家にはその例ありといへども、本朝にいまだかくのごときの先規を聞かず。天照大神・正八幡宮は、王法をばなにとまもらせたまふぞや」と、憚る所もなく打ち口説きたまへば、

(上巻「光頼卿参内の事」)

とあるので、物語でも慈円の人物評と同質な光頼像が造型されていた。光頼は漢詩文に優れており、有職故実にも通じている逸材であつたのである。^{〔37〕}

光頼より後の世代からは諸大夫家の人々を否定的に慈円は捉える。光頼の四男の宗頼をめぐって、『愚管抄』別帖の同時代史なかに、

宗頼大納言ハ成頼入道ガ高野二年比オコナイテアリケル、入滅シタル服ヲキルベキヲ、真ノオヤノ光頼ノ大納言ガヲバ、成頼ガヲキムズレバトテキザリケリ。コレハ又アマリ二世ニアイテイトマヲオシガリテキズ。サテ親モナカリケル者ニナリヌルコトヲ、人モカタブキケルニヤ。カク熊ノ、御幸ノ御トモニマイリテ、松明ノ火ニテ足ヲヤキタリケルガ、サシモ大事ニナリテ、正月卅日ウセニケル。

(巻六——二八六〜二八七ページ)

とあつて、養父の成頼入道が死去したとき喪服を着なかつた宗頼を、自身も程なく火傷が高じて死去したと指弾した。前掲した付録の後半の人材論で「父祖ノ気分ノ器量ノケズリハテ……ワロキ人」(巻七——三五二ページ)としていた論理と延慶本の、

大方此大納言ハ、オ、ケナク思慮ナキ心シタル人ニテ、人ノ聞トガメヌベキ事ヲモ顧ミ給ハズ、常ニ戯レニガキ人ニテ、無レ墓事共ヲモ宣ヒ過ゴス事モ有ケリ。

(二末・一五「成親卿無思慮事」)

としている施線の「思慮ノ無」さが、無謀な平家一門の打倒を企てたと成親を詰っている物語の展開とまさしく

照応する。施線の言辭は、『愚管抄』の「鹿ヶ谷事件」にして「成親伝」の当該の「句」に叙述されている成親像と同一である。⁽³⁸⁾

既存の「世継物語」に倣いながらも『治承物語』は、平家一門を「武力」で討伐する首謀者として成親を登場させた。その意味から、本物語では新奇な「世継物語」の「いくさ物語」の劈頭第一に置かれているのが「鹿ヶ谷事件」といえよう。

おわりに

『大鏡』には、道長が「もし今の冷泉天皇が誕生しなかったら、諸大夫ぐらいの身分に出世して前駆や雑役などになつて歩いていたことであろう」というと、俊賢は「もしそのような堂々とした諸大夫がお仕えしていたら、どんなにか上役の方は見苦しかったでしょうね」と言つたので、道長は「お笑いなされた」とある。道長の言葉聞いて、道長に仕えている俊賢は、気品ある道長が前駆をしたならば、その主は見劣りすると軽口をたたいていたとの説話が語られている（「師輔伝」一〇二）。それは村上天皇と道長の祖父である師輔の女の安子とのあいだから生まれた第二皇子である冷泉天皇が即位し、程なく実弟の守平親王が為平親王を越えて立太子することで藤原摂関家が興隆していった経緯を本説話は主題にしているからである。村上天皇の第四皇子の為平親王は、俊賢の父である源高明の女を妃に迎えていた。為平親王が即位すれば、高明が廟堂で覇権を掌握する事態になることが十分にあったので、藤原氏側は陰謀をめぐらした。政変の表面で多田藏人行綱の遠祖である源満仲と藤原千晴との勢力争いをからませ、心変わりした満仲の密告によって高明は左遷された。が、執政の「臣」である道長と安和の変で左遷された源高明の子でありながら、麗しい主従関係を語っている。そのように語っている『大鏡』に依拠しながら冷泉天皇より三代後の一条天皇の在位する治世を叙述した『愚管抄』では、

カクテ一條院八位ノ後、コノ大入道殿ヒシト世ヲトラニケルノチク、宇治殿マデヲミルニ、サラニく

イフバカリナク、一ノ人ノ家ノサカリニ世モノタシク、人ノ心モハナレハテタルサマニ、アシキコトモナク、正道ヲマモリテ世ヲオサメラレテ、一門ノ人々モワザトシタランヤウニ、トリトニヨキ人ドモニテ、
 四納言トイフモ三人ハ一門ナリ。カクテ世ハオサマリタリケリトミユ。

(巻四——一六九ページ)

として、施線で俊賢をはじめとする四納言に言及しつつ摂関政治の世の人々を波線で讃え、二重施線のように「正道」と揚言する。これは、その当時では執政の「臣」に就いている道長と俊賢との君臣関係を、

イマソノ子俊賢ハ又コトニ御堂ニハシタシク候テ、イササカモアシキ意趣ナカリケリ。ヨキ人ニナリヌレバ、ヒガゴトハ思ヘレドモ、ヤガテ思ヒカヘシ、又ムヤクノアシキ意趣ナドヲフカクムスブコトヲセヌナリ。サテコソワレモ人モヲダシキ正道トハ云コトナレ。

(巻四——一八〇～一八一ページ)

としたのと同質の論理展開になっている。俊賢は道長に対して少しも恨む心がなく、やはり波線部で俊賢を「ヨキ人」すなわち賢臣と寸評しながら二重施線で「正道」としたからである。慈円の生きている治世の政治形態である院政を道理とする展開にも襲用されている。院政を企図した後三条天皇の条の一節であつて、「後三條ノ聖主ホドニヨハシマス君ハ、ミナ事ノセンノスエトニヲチタ、ンズル事ヲ、ヒシト結句ヲバシロシメシツ、御サタハアル事ナレバ、撰録ノ家関白摂政ヲスバロニクミステントハ何カハヲボシメスベキ。タゞ器量ノ浅深、道リノ軽重ヲコソトヲボシツ、」(巻四——一九九ページ)とあるように、二重施線で「聖主」とし、外戚関係になつた藤原摂関家に対して何ら憎み捨てることなく、道理の軽重と人臣の器量から自ら親政を行なつたと讃えている。すなわち藤原摂関家の興隆の犠牲になつた高明の子の俊賢と道長との主従関係を捉えた論理と後三条院の領導する治世でやがて藤原摂関家と和合する関係を築いたとする論理とは同一であるといえよう。

後三条院の第一皇子が即位した。白河天皇である。『愚管抄』皇帝年代記の白河天皇紀に、

此御時院中ニ上下ノ北面ヲオカレテ、上ハ諸大夫下ハ衛府所司尤オホク候テ、下北面、御幸御後ニハ矢才イ

テツカフマツリケリ。後ニモ皆其例也。

(巻二——一〇五ページ)

と、施線にあるように諸大夫が明記され、孫の鳥羽天皇が退位して実権を掌握することになると諸大夫家出身の藤原家成は、別帖の近衛天皇の条に「院第一ノ寵人家成中納言」(巻四——二一五ページ)と評さるに至った。成親の父である。平治の乱で信頼に与したが、「成親八家成中納言ガ子ニテ、フヨウノ若殿上人ニテアリケルガ、信頼ニグセラレテアリケル。フカ、ルベキ者ナラネバ、トガモイトナカリケリ。」(巻五——二三六ページ)とされて、妹が平重盛の室であつたことも幸いして、成親には咎めはなかつた。一方、平治の乱を経て大納言に任じられた清盛が外戚関係を築いて天皇の外祖父になるまでの「清盛伝」の「句」を展開させた慈円は、清盛の妻時子の妹である建春門院滋子であり、滋子と後白河院とのあいだに高倉天皇を生んだので、「女人入眼」の道理に則つて、清盛に筆誅をくわえることなく、我が女の徳子が生んだ安徳天皇が即位して天皇家と外戚関係を築くまでを叙述する。次の「句」の「鹿ヶ谷事件」にして「成親伝」の始発では、

カクテ建春門院ハ安元二年七月八日瘡ヤミテウセ給ヒヌ。ソノ、子院中アレ行ヤウニテ過ル程ニ、院ノ男ノオボヘニテ、成親トテ信頼ガ時アヤウカリシ人、流サレタリシモ、サヤウノ時ノ師仲マデ、内侍所、又カノコイトリタリシ小鈎ナド持テ参リツ、カヘリテ忠アル由申シカバ、皆力ヤウノ者ハメシカヘサレニケル。コノ成親ヲコトニナノメナラズ御寵アリケル。

(巻五——二四四ページ)

としている。滋子が死去したことで、施線のように「院中」の政治が荒廃したといい、成親を圈点にあるように「コノ」として、治世を領導している後白河院に寵愛されている成親を父の家成と同様の視座から把握する。二つの二重施線から判然とするのは、むしろ父よりも院の近臣として寵愛されていたことである。『愚管抄』の当該の「句」では、『今鏡』が語り終えた嘉応二年(一一七〇)よりの治世の有様を語る「世継物語」である『治承物語』を取用していく。慈円圈の西山で「あそび心」から創られた物語であるから、鹿ヶ谷の山荘での「瓶子」

に平氏をかけて、「大納言立帰テ、「瓶子既ニタハレ候ヌ」トソ被レ申ケル。……」として猿楽まがいの物語を仕組む。そのことを「ヤウノノ議ヲシケルト云事ノ聞エケル」(巻五——二四四ページ)と摘記し、「宗ト憑レシ多田藏人行綱、此事無益成ト思心ソ付ニケル。成親卿ノ方ヨリ弓袋ノ料ニトテ送ラレタル白布共、家子郎等力直垂ニ裁着テ居タリケルカ、情見^{ツラ}ニ平家繁盛^ヲ一、輒^{ハヤス}ク難シレ傾^ケ、無^キレ由事ニ与^ユシテムケリ。若此事漏ヌル物ナラハ、……(中略)五月廿九日夜深人静テ、入道相国ノ宿所西八条ヘ行向テ、」(屋代本)とある物語の一節を「用意シテ候ヘ」トテ白シルシノ料ニ、宇治布三十段タビタリケルヲ持テ、」と『愚管抄』では簡約化したのであった。『治承物語』依拠のことわりの注記が「コレハ一定ノ説ハシラネドモ」(巻五——二四四ページ)なのであった。「近臣愚者モテナシノシツ、世ハカタブキウスルナリ。」(巻四——一九九ページ)との論理からも、当該の「句」は「鹿ヶ谷事件」にして「成親伝」とやはり評せるのである。

物語の側をみると、屋代本の巻二の末尾では「成親卿出家事」・「成親禪門逝去事」・「彗星事」で括られており、最末尾の「彗星事」の章段は「彗星東方ニ出。(中略)治承モ二年ニ成ニケリ。」の文がある。因みに、延慶本では成親をはじめとして院の近臣にもふれて「讃岐院之御事」・「西行讃岐院ノ墓所ニ詣ル事」・「宇治ノ悪左府贈官等ノ事」・「三条院ノ御事」・「彗星東方ニ出ル事」となっている。このことを『愚管抄』には、

コノ西光ガ頸切ル前ノ日、成親ノ大納言ヲバヨビテ、盛俊ト云チカラアル郎従、盛國ガ子ニテアリキ、ソレシテイダキテ打フセテ、ヒキシバリテ部屋ニ押籠テケリ。公卿ノ座ニ重盛ト頼盛ト居タリケル所ヘ、「何事ニカメシノ候ヘバ參テ候」トテ、諒闇ニテ建春門院母后ニテウセ給テ後ノ事ニテゾ、諒闇ノナヲシニテ、ヨニヨクテキタリケリ。「出候ハンニコマカニ見參ハセン」トテアリケルヲ、ヤガテカクシテケレバ、重盛モ思モヨラデアキレナガラ、コメタル部屋ノモトニユキテ、コシウトノムツビニヤ、「コノタビモ御命バカリノ事ハ申候ハンズルゾ」ト云ケリ。サヤウナリケルニヤ、備前國ヘヤリテ、七日バカリ物ヲ食セデ後、サウナクヨキ酒ヲ飲セナドシテヤガテ死亡シテケリ。

とある。慈円は院の近臣指弾の意図を介在させながら、成親の末路を詳述した。史論でありながら物語の一場面のように精彩を放っている。『治承物語』が語っている行綱密告より成親の刑死に至る顛末に依拠して、慈円は成親を主軸に叙述したのであった。そのため物語の清盛の厳しい処断の場面の片鱗が明らかに看取されるのであるから、「鹿ヶ谷事件」の「句」は、「成親伝」とも称してよいことをあらためて確認しておこう。

「あそび心」から西山の慈円圈に集っていた人々の手で創られた『治承物語』には、後白河院の出御した鹿ヶ谷の山荘での平家討伐の密議を多田蔵人行綱が平清盛に密告したと虚構され、そして幾分かは実相をもちあめつつ清盛に捕縛されて処断される成親の物語が仕組まれていく。それが『愚管抄』に取り込まれたのであった。

『愚管抄』皇帝年代記の順徳天皇紀には、

……山座主之間二前大僧正慈円ノ四度マデ成テ、カク辞ケル事コソ心得ガタク浅マシキ様ナレ。カウホド辞申人ヲバ上ヨリモイカニ成タビケルニヤ、又下ニモカウ辞申ベクバ、イカニシテ又ナリノハセラレケルニヤ。イカニモノハ様アルベキ事ニヤ。カヤウノ事ハ山門ノ佛法、王法ト相對スル、佛法ノマコト見ヘテ侍ケリ。平ノ京ニウツラルル始ニ、此山門建立セラレテ、イカニモノヤウアルベキ事ニテ侍トアラハニ覺ユレバ、山門ノ事ヲ此奥ニ二帖力キアラハシ侍ル也。其二細ニカヤウニ覺東ナキ事ドモヲバ申ヒラカンズル也。

(中略)

建保六年月日山ノ大衆戴ニ日吉神輿ニ下洛、代々此事甚多不能ハニ記録スル、最略記ナレバ略レ之也。

(卷二——二二二—二三ページ)

この文章が載っている。波線部では慈円が天台座主に在任したのは、施線にあるように仏法王法相依の道理に則っていると揚言し、慈円は自己自身を物語論の「全知の語り」から捉えた。つづけて二重施線で「山門ノ事」すなわち比叡山延暦寺に関する事象は本書の「奥」に「二帖」にまとめて叙述したとことわって、建保六年(二二一八)に延暦寺衆徒の強訴に言及し、その強訴は「代々」にも実に多かつたがすべて省略したと注記していることである。確かに『愚管抄』別帖には、『治承物語』が語った安元元年(一一七五)十二月に成親が知行して

いる尾張国の目代が美濃国平野庄の中堂御油寄人を陵辱した事件により比叡山大衆に訴えられて成親は備中国へ配流されるものの院によつて召還された事象・山門から訴えられて解官した事象・西光の子である師光が加賀守となるとともに師光の弟の師経が目代として同国に入つて早々に鵜河寺を焼き討ちしたので本寺の延暦寺大衆が強訴して天台座主明雲の配流される事象等を叙述してはいない。現存の『平家物語』諸本間の鹿ヶ谷の山荘にいた人物をめぐる異同を窺うと、延慶本では、

平家ヲ討テ引籠ラムトゾ支度シケル。多田藏人行綱、法勝寺執行俊寛、近江入道蓮浄俗名成雅、山城守基兼、式部大夫章綱、平判官康頼、宗判官信房、新平判官資行、左衛門入道等ヲ始トシテ、北面下臈アマタ同意シタリケリ。

(二本・二二「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄合事」)

と参加した連中の名を列举して、施線で示したように最後に「左衛門入道」すなわち西光の参加があったことを語っているが、きわめてかすんでいて印象に残らない。四部合戦状本には、西光の名がなく、平家討伐の陰謀には西光は加わっていないかったことになる。『愚管抄』皇帝年代記の順徳天皇紀にある二重施線で「山門ノ事」を本書の「奥」に一帖にまとめたとする言辞に照らして、慈円圏で創出した『治承物語』も西光の父子の引き起こした延暦寺大衆の強訴から明雲の配流へ展開する「山門ノ事」をめぐる物語と、大將任官の野望を抱く成親そして多田藏人行綱の密告から清盛による成親等への処断へと展開する物語とをそれぞれ別々に語り分けていたと推測されてくる。

『玉葉』安元三年(一一七七)六月一日条に「入道相国八条亭におはし、師光法師召し取り(法名西光、法皇第一の近臣なり、加賀守師高の父)これを禁固す。」とあつて、『愚管抄』で強調した成親と同じぐらい寵愛された後白河院の近臣である。『愚管抄』の「鹿ヶ谷事件」の「句」は「成親伝」と評せることは縷述してきた。したがって成親の末路を物語のように叙述したのも院の近臣指弾の思いが慈円に湧出しているよう。『治承物語』の鹿ヶ谷の山荘をめぐる物語を依拠して『愚管抄』では「成親・西光・俊寛ナド聚リテ、ヤウ／＼ノ議ヲシケルト云事ノ聞

ヘケル」(巻五——二四四ページ)としている。

成親につづけて二重施線にあるように西光の参加もあつたと慈円は史論に摘記したのは、物語と同等に実相として最も寵愛されていた西光を鹿ヶ谷の山荘の場面に組み入れて括つて筆誅を加えたからであらうと思われる。『愚管抄』の文章は、『治承物語』の依拠と実相と道理史観とが纏綿しているので晦渋になっている。

【末尾】

註

〔29〕拙著「第二章 第二節『大鏡』との関係」(『愚管抄とその前後』和泉書院・一九九三年)・第三章『大鏡』から『愚管抄』へ——方法から——(『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年)

〔30〕松本治久『大鏡の主題と構想』(笠間書院・一九七九年)一九一ページ

〔31〕山中裕「第三章 第三節 一 安和の変」(『平安朝文学の史的研究』吉川弘文館・一九七四年)

〔32〕『愚管抄』(岩波書店)補注4—二三に「続古事談・今鏡・発心集に見えるが、大原少将と重家と混合したのは今鏡の記述が頭にあつたためであらうか。」とある。(四二六ページ)

〔33〕拙著「第二章 第四節 保元の乱をめぐって」(『愚管抄とその前後』和泉書院・一九九三年)

〔34〕『平清盛と後白河院』(角川書店・二〇一二年)一四三ページ

〔35〕『平家物語の構成——鹿谷のプロット——』(『文学』第五六号・一九八八年三月)

〔36〕「安元三年の近衛大将人事——『平家物語』と古記録のはざま——」(『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第三二巻第一号・一九九五年七月)

〔37〕井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』(笠間書院・一九九八年)二三九ページ

〔38〕山下宏明「第八章 延慶本における成親説話」(『平家物語の成立』名古屋大学出版会・一九九三年)

【引用資料の典拠】

『愚管抄』は『日本古典文学大系』(岩波書店)、『慈鎮和尚自歌合』は『慈鎮和尚自歌合』(勉誠出版)、『古来風躰抄』は『歌論集』(小学館)、『玉葉』は高橋貞一著『訓読玉葉』(高科書店)、『覚一本』『平家物語』・陽明文庫本『平治物語』は『新日本古典文学大系』(岩波書店)、『延慶本』『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』(汲古書院)、『屋代本』『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』(新典

社、百二十句本『平家物語』は『平家物語』(新潮社、四部合戦状本『平家物語』は『訓読四部合戦状本平家物語』(有精堂、『源平盛衰記』は『源平盛衰記』(三弥井書店)、長門本『平家物語』は『平家物語』(長門本・延慶本 対照本文)(勉誠出版)、『栄花物語』、『大鏡』は『新編日本古典文学全集』(小学館)、『今鏡』は『講談社学術文庫』、慈円の歌類は『校本拾玉集』(吉川弘文館)。

〔附記〕

本稿は拙著「第Ⅱ部 第八章 治承物語の復元」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)の節である「(三) 鹿ヶ谷事件と静賢」の延長線上に位置づけられるものであるが、さらに『治承物語』と六卷本『治承物語』との異同についても若干、言及した次第である。